

第30回天理考古学・民俗学談話会

天理大学歴史文化学科は、今春、従来の専攻制を改めて、研究コース制に移行した。これまでは学生募集・受験の段階から、歴史学専攻、考古学・民俗学専攻という形で分かれていたのが、これからは、歴史文化学科の学生としてまとめて入学し、2年次に進む段階で、歴史学研究コース、考古学・民俗学研究コースに分かれる形に制度が変わったのだ。広く歴史文化に関心のある学生に入学してもらい、1年次の段階では、歴史文化に関わる諸学問の基礎を幅広く学び、そのあとで各自の関心や適性に応じて分野を決定する「レイトスペシャライゼーション」の方向性は、大学入学時のミスマッチをより少なくするという点で、今の時代に即しているといえるだろう。

とはいえ、専門性を深めながら、同時に、幅広く知識や技術を身につける歴史文化学科の学びそのものがらりと変わったわけではなく、考古学・民俗学研究コースでも、従来どおり、考古学と民俗学に関する専門的な教育研究を実践的に進めていくことになる。今春も、考古学・民俗学研究コースでは、研究室の恒例行事として、授業開始まもなくの4月5日、新入生を歓迎するお花見会を開催し、連休を迎えた4月27日には、ふるさと会館を会場に、新旧の卒業生をまじえた考古学・民俗学談話会を開催した。毎年、この時期に開催される談話会では、



写真1 談話会の会場風景

卒業生や教員、ときには学生が、それぞれの研究成果や活動を紹介するのだが、第30回目となる今回は、例年と異なっ

て、この一年に逝去された金関恕先生、置田雅昭先生の学問の歩みを振り返る下記の特別プログラムとなった。

小田木治太郎「金関恕先生と東大寺山古墳の発掘調査」

山内紀嗣「置田雅昭先生と布留遺跡の調査研究」

桑原久男「金関恕先生と天理大学考古学・民俗学研究室」

小林善也「金関恕先生と下関市の考古学」

吉永史彦「置田雅昭先生と遺跡探査」

日野宏「金関・置田両先生とイスラエルの発掘調査」

小田木・山内両氏の報告では、天理大学にまだ歴史文化学科がなかった時代に、両先生が附属天理参考館の仕事として天理市内で行った発掘調査や出土資料の研究の内容が紹介された。考古学の分野で天理大学が全国的に有名なのは、天理参考館の充実したコレクションのほか、大学近辺の古墳や遺跡そのものが素晴らしい内容を持っていること、そして、参考館や大学に所属する研究者・学生が、そうした遺跡に対する先進的な調査研究を早くから進めてきたことによるのだ。

歴史文化学科と金関・置田両先生

平成4（1992）年の大学改組に際して、歴史文化学科の開設

に尽力されたのが他ならない金関先生だったが、先生が構想して発足した当初の考古学専攻は、考古学担当教員が4名、民俗学担当教員が2名という陣容だった。考古学は、最初の主任を務めた金関教授のほか、天理参考館から異動した置田教授、奈良国立文化財研究所から移籍してこられた山本忠尚教授、そして、大学院の博士後期課程を単位取得の形で終えたばかりの筆者が専任講師として加わった。新設された歴史文化学科、なかでも考古学専攻の人気は上々で、全国から多くの優秀な受験生が集まり、競争を突破した学生たちが、充実した教授陣と整った設備環境のもと、切磋琢磨して考古学の専門的な勉学に勤しんだ。今回の発表でとくに印象的だったのは、その歴史文化学科の考古学専攻で金関・置田両先生から教えを受け、現在は、専門を活かし、あるいは専門を離れ、社会の中堅として活躍している卒業生による発表だった。

下関市考古博物館に勤務する小林善也氏は、かつて金関先生が若い時代に携わった土井ヶ浜遺跡、梶栗浜遺跡、綾羅木・郷遺跡の調査を振り返り、金関先生が下関市に残されたものの大きさを紹介した。金関先生は、各遺跡の調査を通して人を育てられ、それが遺跡の保護につながり、現在の展開を導き、さらには、天理大学の卒業生が下関市で先生の志を受け継いでいるのだ。一方、現在は商社で管理職を務める吉永史彦氏は、学生時代は、置田雅昭先生の率いる「遺跡探査チーム」の一員として、西日本各地で合宿しながら遺跡のレーダ探査などを行った経験を紹介した。吉永氏が整理したように、歴史文化学科に職場を移してから置田先生は、遺跡探査が研究の一つの核となり、九州、とくに宮崎県における実験的な段階から、奈良県を含む近畿へと活動の舞台を移し、幅広い遺跡に調査対象を広げ、先生自身は、遺跡探査学会の中心メンバーとして遺跡探査の発展に貢献されたのだ。筆者の報告では、3月21日に天理市内で金関恕先生を偲ぶ会が開催されたこと、それに合わせて先生の追悼文集『春の日に』が刊行されたことなどを紹介した。金関先生、置田先生と言え、師弟関係にあり、年齢が離れ、人柄も大きく異なっていたが、今回の談話会を通して確認できたのは、お二人が、それぞれの持ち分を活かして考古学という学問分野に真摯に向き合い、人を育てられたということだった。

その後、本稿の執筆中、5月3日に元教授・山本忠尚先生（享年75歳）の訃報が伝わり、5日、6日に東大阪市内で執り行われたお別れ会に、各地から多くの卒業生が駆けつけた。歴史文化学科考古学・民俗学専攻の教育研究に多大な功績を残された3名の先生が、はからずも、この1年あまりの間に、次々と逝去されることとなり、沈痛の極みと言わざるを得ない。今は、先生方のご冥福を改めてお祈りしておきたい。



写真2 金関恕先生追悼文集『春の日に』